



Title	「藝術新聞」目録：自第五九九号至第六三二号（不揃）
Author(s)	斎藤, 理生
Citation	阪大近代文学研究. 2021, 19, p. 68-86
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81792
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「藝術新聞」目録

自第五九九号至第六三二号（不揃）

斎藤 理生

一 「藝術新聞」の概要

「藝術新聞」は戦前、文学・出版・絵画・音楽・演劇・映画などに關わる情報を週に一度、新聞の形式で発行していたメディアである。文学関係の情報に特化していた「文藝時報」の後継紙に当たる。「文藝時報」は、一九二五年一月二〇日から一九三〇年一二月二七日まで全一五〇号発行された新聞である。現在では不二出版から全号が復刻されており、『文藝時報』解題・総目次・索引』(不二出版、一九八七)も発行されている。この『文藝時報』の号数を継承し、一九三二年一月一日発行の第一五一号から、紙名のみを改めて発行したのが、「藝術新聞」である』(山内祥史「藝術新聞」目録「自第一五一号至第三七二号（不揃）」『神戸女学院大学論集』一九八九・一二)。

「文藝時報」及び「藝術新聞」には、大正末期から昭和初

期にかけて活躍した多くの文学者が寄稿していた。第六〇〇号（一九四三・一・一六）の一面に掲載された「六百号を迎へて過去十九年を省る その時々の執筆者達」という記事では、以下のように主要執筆者が紹介されている。

本紙も大正十四年創刊以来今号を迎へてまさに六百号を重ねた。幾山河を越えつゝ糺余曲折の時代をすぎて当に彼岸の燈台として報道陣の完璧を期してきた。今六百号を送るに当つて文壇、画壇劇壇の主なる執筆者をふりかえり茲に列記して感謝の意を捧げたい。文壇方面の小説面では（敬称略、順不同）

菊池寛、前田河廣一郎、武者小路実篤、細田民樹、宇野浩二、小川未明、徳田秋聲、豊島與志雄、岡田三郎、加藤武雄、水森龜之助、戸川貞雄、廣津和郎、中河與一、斎藤龍太郎、細田源吉、今東光、片山伸、片岡鐵兵、近松秋江、島崎藤村、横光利一、米川正方、新居格、外山近

卯三郎、下村千秋、賀川豊彦、白井喬一、本山荻舟、白石実三氏等の他、女流では

鷹野つぎ、吉屋信子、中條百合子、柳原燦子、堀江かど江、高群逸江氏等があり、

詩壇方面では大藤治郎、赤松月船、室生犀星、大木惇夫、佐藤春夫、千家元麿、福田正夫、伊福部隆輝、野口米次郎、川路柳虹、高村光太郎、宮崎丈二、堀口大學、百田宗治、西條八十、日夏耿之介、綿貫六助、廣瀬操吉、白鳥省吾、蒲原有明、内藤辰夫、高橋邦太郎、前田鐵之助、深尾須磨子、巽聖歌、與田準一、大関五郎、野口雨情氏等がある。

演劇方面には村山知義、長興善郎、里見弾、相馬御風、宮地嘉六、稻垣足穂、大泉黒石、中村武羅夫、川端康成、上司小剣、尾崎士郎、谷崎精二、山田清三郎、江戸川乱歩、木村毅、吉田絃二郎、生方敏郎、諏訪三郎、昇曙夢、須磨鉱一、倉田百三、松岡譲、大木雄三、織田一麿、前田晃、山本有三、正宗白鳥、平林初之輔、藤森成吉、下村千秋、國枝史郎、高須芳次郎、長谷川如是閑、濱田廣介、林癸未夫、邦枝完二、伊藤貴麿、長田幹彦、額田六福、淺原六朗、森田草平、畑耕一、平山芦江、芳賀融、本間久雄、林房雄、松村武雄、秋田雨雀、本荘可宗、長谷川伸、土岐哀果、金子洋文、久保田萬太郎、関口次郎、

岸田國士等があり歌壇関係では窪田空穂、服部嘉香、生田蝶介、前田夕暮、尾山篤二郎、福田栄一、小泉菱三、阿部静枝、吉植庄亮、川田順、岡野直七郎、川口香枝、今井邦子、板垣喜久子、川上小夜子氏等である。

ここに名は挙がっていないが、伊藤整、大宅壯一、尾崎一雄、鏑木清方、上林暁、金田一京助、窪川稻子、窪川鶴次郎、久米正雄、武田麟太郎、太宰治、萩原朔太郎、藤島武二、藤田嗣治、眞杉静枝、三木露風、三好達治、保田與重郎、山本實彦、龍胆寺雄といった人々も執筆している。

新聞というメディアの性質上、長い文章が書かれていることはなく、談話やアンケート程度のこともある。しかし右のような書き手に恵まれた媒体は、昭和前期の藝術界の動向を多様に映し出しているにちがいない。ただ現在、確認できた範囲で、この「藝術新聞」の全号を所蔵している機関はない。断片的に保有している機関も限られている。そのため全貌を掴むことは困難である。

もつとも「藝術新聞」第一五一号から三七二号までについては、前掲山内「藝術新聞」目録によつてほんまにされている（わずかな欠号はある）。また、五四四号（一九四一・一二・二三）から五九八号（一九四二・一二・二六）までの五五号分（内欠号一）については、青山毅「『藝術新聞』細目」（ブックエンド通信）第七号（一九八二・二）で紹介されている。しかしその前後の号の内容は明らかにされ

ていない。

つまり三七三号から五四三号までと、五九九号以降が不明であった。その後者、五九九号（一九四三・一・二）から六七〇号（一九四四・五・二〇）までの大半を、このたび京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター図書室で閲覧する機会を得た。そのため本稿では、五九九号から六三三号（一九四三・八・二八）までの三四号分（内欠号四）の目録を作るこことよつて、研究史の空白の一部を埋めたい（紙幅の関係上、六三三～六七〇号については次稿に譲る）。

同時期の似たメディアに「日本学藝新聞」（一九三五・一・五）～（一九四三・七・一）がある。両紙の差異について、青山の細目に対する山内の解説「再刊『藝術新聞』を読む」日本文学報国会の成立と第一回大東亜文学者大会の開催を中心にして」（前掲「ブックエンド通信」第七号）では、「藝術新聞」の方が「週刊で発行回数が多く」、「すべて報国会の立場で執筆、編集されているといつてよい」「日本学藝新聞」よりは「自由な立場で編集されている」とする。むろん「藝術新聞」も時代の制約を強く受けている。それでも日本文学報国会の機関紙であった「日本学藝新聞」及び後継紙の「文学報国」（一九四三・八・二〇～一九四五・四・一〇）と比べることで、戦局が悪化してゆく時期の藝術界を複眼的に捉えやすくなるはずである。

「藝術新聞」五九九号（一九四三・一・二）一面には、「定

価 普通版一ヶ月金一円 半年分金五円 一ヶ月年分金十円
特別版普通版ノ五割増」「発行編輯兼印刷人 東京市豊島区
西巣鴨二丁目二八四七 多恵暉雄」「発行所 東京市豊島区
西巣鴨二丁目二八四七 文藝時報社」といった情報が記載されている。発行編輯兼印刷人は、一七二号（一九三一・一・一〇）以来の多恵暉雄である。発行所は「文藝時報」以来の「文藝時報社」である。住所は一九三号（一九三二・一・三）以来変わっていない。また、特に断られていないが毎週土曜日発行も、二五〇号（一九三五・二・二）以降継続している。紙面は当初は八面（合併号を除く）だが、六二三号（一九四三・四・一七）以降は四面が基本となる。

なお、本稿は山内・青山の目録を後継するゆえに、記述も両者の方針に倣っている。すなわち、青山の「細目の記述にあたっては、五百八十四号迄ある巻頭の時評、署名のあるもの（談、インタビューを含む）、ならびに人物評に限定した。ただし、署名がなくても私の主觀で欠かすことが出来ないと判断したものは、採録することにした」という方針に沿っている。ただ本稿では、各面の最初に記載された無署名の記事にも、できるだけ触れるようにした。

二 「藝術新聞」細目（五九九～六三二号）

第五九九号 昭和一八年一月二日発行（同九日合併号）二〇

面

思想戦の中核体成る	言論報国会逞しく発足	小室 翠雲（談）	十
挨拶	情報局次長	奥村 喜和男	
設立趣意書	社団法人 大日本言論報国会	高村 光太郎	
自らに由るの思想を掃滅	政治経済武力戦の完勝へ	加藤 武雄（談）	三
近詠抄	鹿子木貞信	中河 興一（談）	三
われらの道	吉植 庄亮	深尾須磨子（談）	三
情緒の鍊成	久米 正雄	北村 西望（談）	二
技巧に走らざるもの	戸川 貞雄	伊東 深水（談）	二
大きなロゴスを掴め	甲賀 三郎	大森 光彦（談）	二
特集 文学報国会の新構想	キヤビデ攻撃	山口 華揚（談）	一
生産部門振励へ 事務局長	一周年を迎へ	三輪 晃勢	一
新年の構想 事業部長	パリー島舞踊見学	森 守明	一
文藝政策の樹立 総務部長	新春隨想	山口 華揚（談）	一
「ミタカ少国民文庫」力を注ぐ山本有三氏	隣組長と画心	福田 翠光	一
井伏鱒二氏 南より帰る	高き精神鍊磨の必要	青木 大乗	一
邦楽雑感	晨鳥社	大森 守明	一
新年の賦—昭和十八年の新年に残す—	飯盛山の秋 忠烈千古を貫くもの	山口 華揚（談）	一
前田鐵之助	二十年を回顧して 洋画から日本画への道	福田 翠光	一
笹川 臨風	二十年を回顧して 洋画から日本画への道	青木 大乗	一

淨晨 福田 栄一 九八七
文協会員の整備 出版会結成まで其儘か
記録るべき昨年の出版界 著者側にも異変続出
美術家の戦ひ
画壇人も総力戦へ 中央に調査期間を設置せよ
絶対公平を期す 日本画資材協会に就き
絵の根底に道義 居合術で塾員一同を鍛成
彫刻を國家目的に 資材より思想が重大
造型による日華握手 興亜造型文化連盟の成立
創作の歎び
キヤビデ攻撃一周年を迎へ パリー島舞踊見学
新春隨想 隣組長と画心
高き精神鍊磨の必要

志賀高原に築く 美術家鍊成道場	豊田 豊	十五	良き情威を—産業戦士の上に—
美術各界四十氏の協力	邦枝 完二	十四	末歳隨想
昨年諸展観の願望	宇田荻邨	十三	聖戦二年を迎えて 京洛行事と「真心」
国民文化振興 三大藝能コンクール	驅潜艇	十二	文藝時評 世界観の問題
陽春三月晴の入賞決定	五島 茂	十一	文学報国会 近畿総会記
藝能家の矜持	中村武羅夫	十	京都洋画家連盟成る 市展中心に百余名参加
都下七大劇場の正月出し物決定	豊田 豊	九	播州赤穂にて—眉仙画伯の襖絵を觀る—
情報局参加作品は二本	藤井 清水	八	敵性音盤千余種を徹底的に整理せん
共栄圈建設を目指し 映画文化の交流旺ん	菅原 雷吉	七	ジヤズ等に最後の断
日満華の提携作品三本決定	民謡作曲私見	六	昭和十八年の舞踊界に望む
昭南より帰りて	新洋会公演評 (一)	五	社団法人 大日本興行協会 結成準備全国協議会
シンガポール総攻撃南方派遣隊企画部長	新洋会公演評 (二)	四	十二日大東亜会館に開催
三浦 信夫	七	劇評 明治座 (藝術座)・有楽座 (ロッパ一座)	三
各社の正月映画興行 封切番組夫々決定す	二十	撮影所も戦場なり 優秀所員を表彰す	二
音盤会社の整備統合 当分現状を維持せん	二十一	須田所長念頭の決意披露	一
失明勇士と音楽 館岡謙之助	二十二		
如是我聞 小山 徳彦	二十三		
第六〇〇号 昭和一八年一月一六日発行 八面	二十四		
大政翼賛会 米英撃滅大二年に備へ 文化事業方針凝議	二十五		
各分班にわたり根本綱領決定	二十六		
六百号を迎へて 過去十九年を省る	二十七		
その時々の執筆者達	二十八		
第六〇一号 昭和一八年一月二三日発行 八面	二十九		
世紀の献納画 日本画作家総結集 彩管報國の赤誠吐露	三十		
四十八団体千七百余者が 愛國の作品一般にも公開	三十一		
大政翼賛会文化部 本年度事業計画	三十二		
忙中閑	三十三		
逗子八郎	三十四		

歴史閉づ (早苗会)回顧四十五年	基金三万円の用途今後の懸案
発展的解散へ	
思出多し	
時代の動きに	
国文学部総会	案本 一洋 (談)
全国文学者の総意	庄田 鶴友 (談)
歌人俳人も激励協力を誓ふ	三宅 風白 (談)
四月から実施される	二
新刊書籍の買切制	
成否は運用の	
如何にあり	
目下考へられてゐる	
業者の諸対策	
大阪駅構内に	一
書籍販売店新設	一
古本専門店まで出現す	一
手弁当新年宴会で	一
陸海軍病院へ献画計画	一
洛西嵯峨画家隣組初常会	一
副島種臣の書	一
その皇室中心主義	一
話題の人々	一
藝術院会員	一
日本画部	一
下馬評にのぼる六画伯	一
中北支工藝視察 (三)	一
興亜造形文化連盟	一
『隈取十八番』の続編上梓を聞いて	一
少国民音盤の向上を期し	一
関係者が鍊成会を開催	一
少国民、音盤文協が共催で	一
演劇すべてを戦争へ	一
各興行部門の整備	一
内務省再編成に乘出す	一

第六〇四号

昭和一八年二月一三日発行 八面

大映東京第一撮影所長 鶴田孫兵衛

大映社内機構改革、長期戦に對処せん
近く人事の更迭も断行
『風雲の春』に就いて

八

路傍の石も叫ばしめよ	高村光太郎	（談）
発足遅る 出版企業の整備	日本出版会誕生未し	
新発足は三月上旬の見込		
戦時下の装幀		
文壇時評 惟神道と日本画——日本水墨会に与ふ——	庄司 淩水（談）	
太平洋哨戒の話に作家態度を正す	九頭竜川足	
真剣味溢るゝ春台展懇親会		
播州赤穂にて（三）——眉仙画伯の襖絵を観る——	豊田 豊	
藝能団体と総動員 舞台の上から貯蓄奨励	五	

二百卅億に最後の仕上げ 舞踊の社會性（上）	鳴元 薫元	六 六	根本問題の解決 既に買切制実施	平凡社支配人 新太陽社	齋藤道太郎	（談）
音盤界 敵性レコード獻納運動を展開 非協力者は嚴重取締る	木村 正治	（談）	読書家の立場から 建艦運動の巨陣—蹶起した藝術院会員—	木村 正治	（談）	三 三
興行分業へ 三月発足の昭和演劇 今後の運営全く整ふ 松竹は劇場を籠寅は劇團を われら美しき輪とならん	鳴元 薫元	六 六	大政翼賛会文化部長 中北支工藝視察（四）	高橋 健二 大森 光彦	健二 四	（談）
陸軍記念日に映画配給社の計画 撃ちてし止まむ……の巡回映写隊を派遣	壺田 花子	七 七	画室訪問 —田中咄哉州の巻—	高橋 健二 大森 光彦	健二 四	（談）
第六〇五号 昭和一八年二月二〇日発行 八面 果然熾烈化す献艦運動 藝術各界一齊に蹶起す 全部門 統一団体殆んど参加し 翼賛会文化部中心に火蓋切る 一 時の人 藝術は政治なり	壺田 花子	七 七	挙る赤誠 建艦運動関西へ波及 高橋翼賛会文化部長下洛 京都各藝能家と懇談む 産業戦士の健全娯楽に 投げ出す拾萬円	高橋 健二 大森 光彦	健二 四	（談）
情報局第五部第三課長 井上司朗氏 定型律か自由律か（2）詩を論ずべき時にあらず —詩に音樂をとり戻せ—	西條 八十（談）	二 一	客がおとなしくなりました 東京市が一肌ぬぐ善導費 上原、小暮の両スターを国劇に訪ぶ	高橋 健二 大森 光彦	健二 四	（談）
梅 荻原井泉水 倉田百三氏逝く ○○部隊より駆けつけた 人眼をひく軍服姿の喪主	荻原井泉水	二 一	一路映画報国へ 国家総力戦に呼応し 松竹大船五大作品企画 極力映画報国の誠を尽さん 藝能専門学校巡り 旧名に戻つて新発足 前途洋洋々校勢揚る	高橋 健二 大森 光彦	健二 四	（談）
四月廿一日から実施の買切制を検討す 返品は絶対に許されなくなる 実施方法に就て 日配・企画課長 青木 堯（談）	三 三	第六〇六号 欠号	第六〇七号 昭和一八年三月六日発行 八面 漢詩・漢文学部会 準備委員会設立役員銓衡中	五 五	新築成つた新以知庵 高橋 健二 大森 光彦	健二 四

時の人	重点主義で行きたい	音盤文協専務日蓄工業常務	武藤興一
定型律か自由律か（4）	詩は須らく定型たれ	朗誦文学研究会設置	文学報国会の新企画
日本固有の音律へ	女流文学者幹事会一	日本出版会の発足	大木 悳夫（談）
女流文学者号の献納運動に拍車	浅春	婦人雑誌へ望む 戰時下女性の眞の姿	長谷川かな女
日本出版会設置 文学報国会の新企画	評論家	戦艦献納と美術家の態度	高良 富子（談）
大木 悳夫（談）	長谷川かな女	先づ脚下を見よ	齊藤 十畝（談）
一	高良 富子（談）	精一杯努力して	大森 光彦（談）
一	長谷川かな女	中北支工藝視察（六）	豊田 豊
一	高良 富子（談）	未曾有の嚴選に 飛躍の独立美術展	大森 光彦（談）
二	長谷川かな女	従軍作家の成果展開	大森 光彦（談）
二	高良 富子（談）	日本歴史画展管見	大森 光彦（談）
二	高良 富子（談）	日本舞踊界総動員で 戰艦献納舞踊会開催	大森 光彦（談）
二	高良 富子（談）	十一、二の両日軍人会館で	大森 光彦（談）
二	高良 富子（談）	舞踊の社会性（中）	大森 光彦（談）
二	高良 富子（談）	陸軍記念日を期し 都下劇場打揃つて	大森 光彦（談）
二	高良 富子（談）	撃ちてし止まむ 上演	大森 光彦（談）
三	三	第六〇八号 昭和一八年三月一三日発行 八面	資材難に對処して 映画興行変更せん
三	三	出版界新編成へ 日本出版会創立總会	十日制から紅白二週制へ
三	三	決戦下の出版文化茲に全し	戦時下のスタア訪問記（二）スタア戦線を排斥す
三	三	時の人 国民藝術を創りたい	水島道太郎氏 月岡夢路さん
三	三	情報局第五部第二課長 不破祐俊氏	
三	三	戦ふ決意も新た 文報・報国大会	
三	三	四月上旬軍人会館で花と開く	
三	三	時事を	
三	三	南方の新感譜	
三	三	米・英撃滅の為めに 高い出版文化を要望	
三	三	戦艦献納と美術家の態度	
三	三	精一杯の仕事を献納	
三	三	在野の統合に就て 今秋展を期し大に緊張	
三	三	座談会 戰争と絵画	
三	三	小林 古径（談）	
三	三	田中佐一郎 松島一郎 中間冊夫 藤岡一	
三	三	玉村方久斗（談）	
三	三	中北支工藝視察（七）	
三	三	西山塾青甲社の壯舉	
四	四	産業戦士を画で激励	

第六一二号 昭和一八年四月一〇日 八面

書斎から実戦へ 筆の戦士決戦の誓

警戒警報下 文学報国大会開く

藤島画伯年譜（下）

短歌の群読と朗誦

吉野の春 翼賛文化部の新企画

愛国百人一詩（四）

大阪日本詩壇の詩人賞に「黄風抄」決定

第二回 航空文学賞 真室三郎氏

日本出版会の各理事就任決定 理事長には久富氏就任

南方土産話（下）雑誌の進出は 今後十年後か

文藝春秋編輯局長 斎藤龍太郎

西田塾の工場巡回展 関東中京で二十七工場

産報の取扱方針漸く決定す

工場巡回展の方法 指導と調査を行ふ

産報参与 志賀健次郎氏

戦艦献納画に就て

上野の桜と咲き競ふ 日本画院展堂々開催

出陳百五十授賞十三の盛況

長流画塾 献納画展參觀（上）

愛国百人一首の作曲家を訪ねて（二）

佐々木すぐる氏（下）

特輯 戰時興行の行方

吉野の春 翼賛文化部の新企画

上村 松園

豊田 豊

六

六

四

四

三

三

二

一

歌舞伎の代役でもいいから 白紙に還つて進みたい

東京劇場 仲野 金雄

新橋演舞場 丸山喜代次郎

日本劇場 松村 俊雄

有楽座 加藤源次郎

歌謡の代役でもいいから 白紙に還つて進みたい

東京劇場 仲野 金雄

新橋演舞場 丸山喜代次郎

日本劇場 松村 俊雄

有楽座 加藤源次郎

歌謡の代役でもいいから 白紙に還つて進みたい

東京劇場 仲野 金雄

新橋演舞場 丸山喜代次郎

日本劇場 松村 俊雄

有楽座 加藤源次郎

歌謡の代役でもいいから 白紙に還つて進みたい

東京劇場 仲野 金雄

新橋演舞場 丸山喜代次郎

日本劇場 松村 俊雄

有楽座 加藤源次郎

歌謡の代役でもいいから 白紙に還つて進みたい

東京劇場 仲野 金雄

新橋演舞場 丸山喜代次郎

日本劇場 松村 俊雄

有楽座 加藤源次郎

歌謡の代役でもいいから 白紙に還つて進みたい

東京劇場 仲野 金雄

新橋演舞場 丸山喜代次郎

日本劇場 松村 俊雄

有楽座 加藤源次郎

歌謡の代役でもいいから 白紙に還つて進みたい

東京劇場 仲野 金雄

新橋演舞場 丸山喜代次郎

日本劇場 松村 俊雄

有楽座 加藤源次郎

歌謡の代役でもいいから 白紙に還つて進みたい

東京劇場 仲野 金雄

新橋演舞場 丸山喜代次郎

日本劇場 松村 俊雄

有楽座 加藤源次郎

歌謡の代役でもいいから 白紙に還つて進みたい

東京劇場 仲野 金雄

新橋演舞場 丸山喜代次郎

日本劇場 松村 俊雄

有楽座 加藤源次郎

歌謡の代役でもいいから 白紙に還つて進みたい

東京劇場 仲野 金雄

新橋演舞場 丸山喜代次郎

日本劇場 松村 俊雄

有楽座 加藤源次郎

歌謡の代役でもいいから 白紙に還つて進みたい

東京劇場 仲野 金雄

新橋演舞場 丸山喜代次郎

日本劇場 松村 俊雄

有楽座 加藤源次郎

歌謡の代役でもいいから 白紙に還つて進みたい

東京劇場 仲野 金雄

新橋演舞場 丸山喜代次郎

日本劇場 松村 俊雄

有楽座 加藤源次郎

歌謡の代役でもいいから 白紙に還つて進みたい

東京劇場 仲野 金雄

新橋演舞場 丸山喜代次郎

上海、南京、北京にて機關誌発行 建艦献金の 文学者揮毫展 好評上乗の売れゆき 愛國百人一詩 (五)	二	二	二
短歌群読問題 (一) 連作か長歌を選べ 雷田 空穂 日本出版会に要望す (上) 当面の二つの問題 先づ出版業者の整理から	二	二	二
婦人大衆諸雑誌の発売日変更さる 興行調整の各館成績 現状では経営不可能 結局映画館を整備せん	二	二	二
シンガポール総攻撃制作の意義 大映東京撮影所 所長 須田鐘太	三	三	三
第六一四号 昭和一八年四月二十四日発行 四面 東条内閣・新陣容の薦進 内閣大改造を断行 朝野一体の大政治力結集 時の人 日本出版会を 切廻す三人男 久富陣營の花形	四	四	四
米英撃滅精神の鼓舞 文壇人は挙つて 爆弾や魚雷に署名せよ 愛國百人一詩 (六) 軍人援護週間を 文報が詩歌で昂揚 慰問に講演に指導に	二	二	二
短歌群読の問題 (二) 短歌群読私案 前田 夕暮	二	二	二
第六一六号 昭和一八年五月八日発行 四面 日、比を貫く親善 東条首相電撃視察 比島民衆今こそ奮起の秋 美報初代会長に 大観画伯を推薦 深くして美しい 戰時下の国民座右銘 六月中旬選定結果発表 百人一詩を選んで (二) 愛國百人一詩 (八) 大和當麻寺	一	一	一
北見志保子 今井 邦子	土屋 竹雨		
第六一五号 欠号			
第六一六号 昭和一八年五月八日発行 四面 書評 大東亜戦争詩集 海原にありて歌へる 大木惇夫著 興行調整の第三週 望楼、家共に振はず 低番線は悲鳴を挙げん			三
日本出版会に要望す (中) 出版物の計画配給 適正配給の順位を設けよ			三

映画製作態度に 国際性の考慮要望 音楽大進軍
敵機空襲 満洲への輸出禁止
問題の巨篇「男」 全ロケを終り
山根壽子さんは語る

第六一七号 昭和一八年五月一五日発行 四面

逞しき文化戦の一翼 美術報国会創立総会

堂々！四百名の画伯參集

社団法人日本美術報国会定款（案）

短歌群読の問題（五）決戦精神の昂揚

百人一詩を選んで（二）

愛国百人一詩（九）

紫雲英咲く頃

出版会の重大使命を 関西業者に力説す

関西出版業者懇談会開催

辞典不足で 学生困難 共同使用を依頼す

記念日を期して公開 映画「海軍戦記」完成

山本司令長官の初登場

水原秋桜子 照井 瓔三
土屋 竹雨

第六一八号 昭和一八年五月二二日発行 四面
戦ふ藝術必勝への総進軍 皇國美術の確立へ
全部門一丸新発足 誓ひも固し美報の創立総会
日本美術報国会定款（下）

一一 四 三三 一二 二二 一一 四 四

女流作家が総出勤で 海の勇士へ慰問文
「海軍展」に呼応して 百貨店にて
みことかしこみ

愛国百人一詩（十）

短歌群読の問題（六）幽玄莊重であれ
国家興隆の関頭に起ち 美術家へ期待大なり

三千年来の技術を守り 大政翼賛会副總裁

美術の設立経過 皇國美術の確立を望む

日本美術及工藝統制協会 会長

日本美術及工藝統制協会 設立趣意書

大陸映画と提携作品 美報と表裏一体

情報局文藝課長

日本美術及工藝統制協会 設立趣意書

大陸映画と提携作品 今後は脚本事前検閲

当局より関係者の方針説明

第六一九号 昭和一八年五月二九日発行 四面

枢軸・中立各国へ 「日本文学」の贈物

国際文化が文報に提案

時の人 映画報国に邁進せん

大日本映画専務 河合龍齋氏

山本提督の悲報を伝へ 撃滅に燃え起つ 「詩の夕」

「艦たてまつれ」共立講堂に開く

百人一詩を選んで（三）

土屋 竹雨

二二 一 一 四 三三 二二 二二 二二

愛國百人一詩（十二）

五月の庭

川上小夜子

大物出版の計画が 最近続々発表さる

良書と企画（一） 異色ある出版物

：明治美術研究所：

南方映画工作の現況を視察して

城戸松竹専務大船所長帰朝談

平出大佐 推薦文 「海ゆかば」に

東宝 虎彦龍彦準備進む 原作者 坪田譲治氏語る

帰還第一回 出演を控へて

細川俊夫

第六二〇号 昭和一八年六月五日発行 四面

一億敬弔英魂を送る 山本元帥の国葬

举国一丸聖戦完勝を誓ふ

新戦場へ美術家動員 栄えの廿六氏近く進發

「勝利の陸軍魂」を万代に伝ふ

日本文学報国会人事機構一覧表（五月末現在）

軍人援護献納作品 盛大を予想される献納式

本月中旬日比谷公会堂にて挙行

百人一詩を選んで（四）

愛國百人一詩（十二）

黒南風

擊滅へ・献金へ 賑つた辻小説・詩展

久米 土屋 竹雨

二二二二二 一一一 四四四 三四三 二二二

第六二一号 昭和一八年六月一二日発行 四面

わが油絵界の巨匠 中村不折画伯逝く

画壇書道界挙げて痛惜

岡部文相弔詞

文報「短歌部会」が支部規定・準則発表

愛國百人一詩（十三）

百人一詩を選んで（五）

実作指導を兼ね 短歌の夜間講習会

広く勤労人の参加を希望

女流歌人が奮起して 挺身報国団を組織

「ひさぎ会」は発展的解消

盟邦独逸へ渡る 聖徳太子の御遺徳

伝統千年の「悲田院」独訳

書評 美くしき朝||その他詩集・藝談||

大映「戦陣に咲く」は突如上映を禁止さる

東宝「若き日の歎び」は大削除

土屋 竹雨

四 三三二二二二二一一 四 三三

生ける提督 山本元帥の伝記
発行の許可是三名 多数申請者から厳選
良書と企画（二） 推薦図書が多い||青磁社||
官庁・文化事業団体の 映画製作積極的に協力す
映画に思想戦弾丸の

第六二二号 昭和一八年六月一九日発行 四面

戦時日本の誇り 藝術の華文展の胎動

愈よ会員会議再開 審査制改革案をめぐつて論争か

情報局機構及人事一覧表

慶大に鏡花室を設け 遺品や遺稿を保存す

遺稿の装幀は清方画伯

短歌群読の問題（七）表現に感動を盛れ 五味 保義

愛国百人一詩（十四）

ライ語入り狂歌番附

近詠

掌話 邦枝氏 珍品入手

一月前に予告して 図書を買切制へ

七月廿一日から愈々実施

満洲の読書界 日本物が全盛

古本屋の貸本料 愈々最低は十銭ときまつた

書評 堀口氏「檳榔樹」と大類氏の「日本の城」

良書と企画（三）文化叢書を讀ふ॥アルス॥

今後の映画製作に關し 映画三社当局と懇談

再びこの失敗なきを期す

第六二三号 昭和一八年六月二六日発行 四面

在野派も審査陣に合流 文展の決戦体制成る

地方へ出張監査の新制度

文展委員会 ◇委員九十四名任命

文展審査員 ◇七十九名（いろは順）

文報の詩集賞は 今年度より授與す

権威ある著作賞とする方針

愛国百人一詩（十五）

浜名湖初夏

谷萩陸軍報道課長 文壇首脳に講演

烈々二時間余の獅子吼

広く公共読書団体へ図書優配の拡充化

読ませる指導の先登に図書館

書評 「三十三年の夢」「双竹亭隨筆」外一篇

映画「世界に告ぐ」を東條首相に贈呈

◇：盟邦独逸映画産業界より

「海軍」の製作に就て 松竹京都

田坂 具隆

中村

正爾

一一

二二

華北文壇愈々活躍 文藝雑誌を創刊

「華文」と「文学集刊」

愛國百人一詩（十六）

雜詠

緊急諸部門に対し 洋紙追加割当をなす

柴原希祥

丹羽氏の従軍記「報道班員の手記」絶版
計画出版が愈々具現化

三

書評 「左手で画く絵」「朝菜集」「空の御盾」

三

イスの女流詩人から 憧がれの日本へ詩集の贈物
航空記念日を期し 空の決戦映画公開

三

各社が国民におくる雄編

二

第六二五号 昭和一八年七月一〇日発行 四面

大東亜建設の花開く 日泰文化使節の交換

二

十名を選び今秋派遣

一

大政翼賛会 宣伝本部陣容成る 民間から二百名委嘱

一

中村不折小伝（二）

一

思想戦の精銳が 決戦下言論陣を布く

一

期待される国民学術協会の講堂

一

愛國百人一詩（十七）

一

感激の独訳 古事記に就て（一）

二

一日だけの百姓では ◇：某作家は語る

二

出版はどうなる三人の女性

二

各方面に奇異の感を与へた 中央公論の自発的休刊

二

愈々纏つた編輯新陣容成る

文字と闘ふ廿四年 最大漢和辞典完成へ

文理大教授諸橋博士の偉業

良書と企画（三）全廿四巻の国学体系

中国叢書の新企画 地平社

決戦映画界の急務 映画科学協議会設置

三

研究所設立の前提として

三

市川哲夫第二回作「日本娘」と決定

三

高峰三枝子も特別出演

三

第六二六号 昭和一八年七月一七日発行 四面

稀に見る國士の風貌 島田墨仙画伯逝く

四

氏の生涯を思はす清く静かな葬送

四

肖像画家として 画格を完成した

四

非常に正しい一徹な性質

四

海軍報道部課長更迭す

四

◇：栗原大佐新任 平出大佐は軍令部課長

四

勝ち抜く文化戦に 逞しき文化奉公会

四

靖国の英靈に米英撃滅を誓ふ

四

ジヤカルタに佐官待遇 武田麟太郎氏活躍

四

愛國百人一詩（十八）

四

感激の独訳 古事記に就て（二）

三

決戦下出版界の 統制指導愈々強化

三

木下 祝夫

二

木下 祝夫

二

木下 祝夫

二

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

- 83 -

書籍雑誌両委員会陣容成る

共栄園のヨイコに 絵本「周遊日本」を送る

日本歴史も二万部発行

上期の現代劇製作 成績頗る平凡に終る

下半期の製作に稍々待望

第六二七号

昭和一八年七月二十四日発行 四面

文報が全国各地の傷痍軍人を慰問

古典物や短歌、俳句など講義

大政翼賛会文化部機構・人事一覧表

中央協力会議に 「読者隣組」を提案

久米氏の「紙の弾丸」に反響湧く

愛国百人一詩 (十九)

文化の防人として 新しい脚本を提供

感激の独訳 古事記に就て (三)

廿五周年を迎へ 朱葉会記念展を開催す

八月三十日より美術協会で

街の展観評 清光会展 東邦画研究会展

映画俳優の交流と 舞台俳優出演盛ん

注目すべき最近の傾向

映画演劇の創作に 文報が愈々乗出す

戦場精神昂揚の戦力増強のため

第六二八号 昭和一八年七月三一日発行 四面

文展問題を繞つて 委員会数次召集

審査員辞任・善後策注目さる

国宝美術品 回収銅物件審査委員会

委員、幹事長等発令さる

中村不折小伝 (4)

まつたを知らず 壁文藝第二輯を配布

我が軍政監部が 日本文化の紹介者を表彰

「花と兵隊」の訳者等に

愛国百人一詩 (終)

文報主催の短歌講習 爆笑裡に盛会好評

飛んだ珍歌も飛び出して

かはほり

書籍出版の企画は どんな状況にあるか

決戦体制即応の新方進

書評 热河、皇民の詩 「たいわたな」

自著の売れ行きに 前田夕暮氏驚く

「詩集青天祭」二版印刷中

映画 演劇界が航空精神普及運動

九月航空記念日を中心て展開

映評 急降下爆撃隊 独ウフアの大作

石井

柏亭

石塚

柏亭

友一

四 四 三 三 三 二 二 一 一 一 一 一 一 一

第六二九号 昭和一八年八月七日発行 四面

米英文化を撃滅し 共榮圏文化確立へ

第三回大東亜文學者大会

中村不折小伝（5）

言報、北海道支部 発会式盛大に挙行

思想戦大学講座も開く

感激の独訳 古事記に就て（四）

満洲開拓地の視察

日本出版界最初の図書推薦発表さる

特に科学振興を重視

書評 陸軍報道班員手記 我ら傷つくとも

推薦図書 どんな方法で選ばれるのか

人の機構や順序

大映と日活が今度は合併か ◇：両専務は語る

提言 映画の娛樂性 制作者の反省を望む

大映と日活が今度は合併か ◇：両専務は語る

提言 映画の娛樂性 制作者の反省を望む

第六三〇号 昭和一八年八月一四日発行 四面

大東亜文化の総力結集

第二回大会代表顔触れ 決戦に備へ編輯人を動員

第二回大会の使命 三項目の凝議に終始

戸川 貞雄（談）

石井 柏亭（談）

中村不折小伝（6）

第二回大東亜文學者大会 代表者（百名）決定

石井 柏亭

木下 阿部 静枝

二 二 二

一 一 一

文壇防空壕めぐり（二）

モーターを取附けた完璧さ＝西条八十氏の巻＝

感激の独訳 古事記に就て（五）

鉢山文学の樹立 作家側も必勝挺身

文報機関紙「文学報国」 来る廿日創刊

戦時下に吻と一息 不忍池畔の観蓮会

笹川臨風氏を中心に

国民運動としての読書運動を展開せよ

戦力増強の新方向を目指して

映画の配給に潤ひ

褒賞制フィルム特配 配給方法は当分変更なし

映画と演劇の強力指導へ

新任の海軍報道部 庄田少佐語る

映画の配給に潤ひ

褒賞制フィルム特配 配給方法は当分変更なし

映画と演劇の強力指導へ

新任の海軍報道部 庄田少佐語る

第六三一号 昭和一八年八月二一日発行 四面

大東亜文學者が 真に決死報国の秋

第二回大会に課せられた使命

社団法人日本文學報国会機構人事一覽表

決戦文学精神の確立－文學者大会に望む－

文壇防空壕めぐり（二）

鉢兜で隣組共同壕へ＝阿部静枝氏の巻＝

感激の独訳 古事記に就て（六）

木下 祝夫

二 二 二

二 二 二

二 二 二

二 二 二

いねがてに

秋聲老病む 坂口内科に近く入院
決戦読書界の様相 重版物に殺倒す
毛利、毛利山本、毛利三木也

日本移動映写連盟 売切買切り制が示す受註状況 設立協議会を開催

国民士気の昂揚に乗出す

藤村先生の御靈に捧ぐ
島崎藤村を想ふ 「書下し」と自費出版の先駆
島崎藤村年譜 (二) 自明治五年至明治二十五年
岡部文相弔辭 中村武羅夫 柳虹 川路

島嶼藤村年譜（二）自明治五年至明治十五年
岡部文相弔辭
想ひ出あれこれ 藤村移動美術館など
快画に事美之へへて、漁り自尊流利
有島 生馬

川路の先駆 柳虹

想ひ出あれこれ 藤村移動美
中央二事美之、二、二、強力

第六三二号 昭和一八年八月二八日発行

絶対不敗の誓も固く 全東亞今ぞ新生す

文學者大會燦然開幕

文学者大會第一回に拾ふ
大東亜文學の創始は大東亜戰勝の吉

大東亜文學の創造は、大東亜民族の精神、天羽情報局總裁演説要旨

天羽情莘局編裁演說要旨
三代之渾之文豪 島崎藤村

三作に渡り、¹²「豪島嶼前林氏急達」
大磯別邸にて「東方の門」執筆中

（以下次号）
（やじ・よひ・まさお／本学准教授）
〈付記〉 本研究はJSPS科研費17K02450の助成を受けたものである。

86 -